

### <書評と紹介> 猿谷弘江著 『六〇年安保闘争 と知識人・学生・労働者：社会運動の歴史 社会学』

中村, 勝己 / NAKAMURA, Katsumi

---

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

766

(開始ページ / Start Page)

74

(終了ページ / End Page)

78

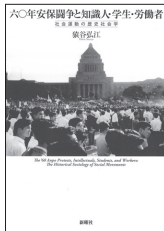
(発行年 / Year)

2022-08

猿谷弘江著

## 『六〇年安保闘争と知識人・学生・労働者』

——社会運動の  
歴史社会学』



評者：中村 勝己

大変な労作である。六〇年安保闘争を頂点とする運動史を、戦後改革（第一章）、知識人の論壇での活動と政治参加（第二章）、学生運動（第三章）、労働運動（第四章）に分けて記述し分析している。これに社会運動史を論じるにあたっての理論枠組みに関する序章と、全体を総括する終章が加わる。上記の三つの運動が一九六〇年という一点で「たまたま」「交差した」（本書 275 頁）ピークとして六〇年安保闘争を位置づけており、著者のこうした複合的な視点は、社会運動史研究が社会学であると同時に歴史学でもあることを実感させてくれる。六〇年安保闘争を叙述するこれまでの語りを書き換える試みである。

本書の刊行は 2021 年 3 月末だが、巻末参考文献に挙げられているインタビューの日付は 2008 年から 10 年に集中している。インタビューを行ってから 10 年以上の歳月をかけて著作に仕上げたことになる。インタビューに応じた人々のなかにはその後亡くなった方々も含まれており、本書は貴重な証言録ともなっている。

これまでおそらく活動家たちが直感的に「作風の違い」とか「センスの違い」と呼んできた

ものに、運動領域やハビトウスの違いに由来する「話の通じなさ」や「違和感」があったし、今もあるようだ。学生活動家は組合活動家に上意下達式の権威主義を感じることもある。年長の活動家が年下の活動家を「ほうれんそう（報告・連絡・相談）」も出来ない未熟者と見なすこともある。本書は、こうした「話の通じなさ」を「共約不可能性」と呼び換え、上記の作風の違いをピエール・ブルデュー由来の「フィールド」（日本では〈場〉とか〈界〉とも訳されてきた）の違い、そこで働く「ゲームのルール」の違い、活動家が内面化した「ハビトウス」の違いとして再定式化して見せた。ブルデューの「フィールド」論を社会運動に適用することで、こうした運動に広くみられるコミュニケーション上の齟齬を単に路線の違いや活動家のパーソナリティの問題に還元せず考察することができるようになる。問題は、そうしたアプローチにどの程度の発見術的な効果があるのか（ないのか）である。

イタリアの独創的なマルクス主義理論家アントニオ・グラムシは『獄中ノート』において「有機的知識人」という概念を練り上げた。ベネデット・クローチェのように生活に困らない家産と立派な書齋を持つ「伝統的知識人」に対して、新しい階級（特に労働者階級）から生まれこの階級のために理論と実践を結合するタイプの知識人だ。グラムシによれば、このタイプは、狭い意味での知識人だけではなく、人々に語りかけ説得し彼らを組織する役割を果たしている者であれば誰でも知識人とみなされるべきだとされた。ブルデューによれば、グラムシ的な〈有機的知識人〉は、結局のところ特定の政党に所属しその指導に従うことで自らの思考の自立性を喪失してしまうものとして退けられる。しかしそのブルデューも、晩年には「知識人のインターナショナル」を呼びかけて普遍的

な課題に取り組むようになった（加藤晴久『ブルデュー 闘う知識人』参照）。

久野収と清水幾太郎は、どちらも大学の正規の教員として仕事をしながらも、労働運動、学生運動、市民運動にコミットすることを通じて、新しいタイプの知識人類型を自ら実践した。二人の実践が1950年代から続くものであることを思えば、ブルデューの提起に40年ほど先立っていたとも言える（もちろんブルデューにはサルトル、フォーコーらの先行的モデルがあった）。本書で紹介される久野収のエピソードが実に興味深い。フランス式デモを日本に紹介し実践したのが久野収だったということ評者は本書を読んで初めて知った。もはやジグザグデモもフランス式デモも警察の規制で出来なくなった今日の日本では、もっと知られてよいことである。

清水幾太郎は大学人としての文化資本が他の知識人に比べて低かった（本書129頁、302頁の注68、334頁の注126など）という評価は何を根拠にしているのだろうか。丸山眞男、鶴見俊輔、竹内好らが国立大学の教官であったのに対し、清水が学習院大学という中堅私立大学の教員だったからか。また「久野や他の進歩的知識人とは異なり、戦争体験や敗戦という節目は、清水に強い印象を残さなかった」（本書132頁）という評価は理解に苦しむ。清水の自伝『わが人生の断片』に書かれてあることは信頼するに値しないと著者は考えているのか。

学生の運動については、全学連反主流派＝都自連（後の全自連）系の情報の薄さが気になったが、これについては後で述べる。労働者の運動については、前田裕悟という稀有の労働運動活動家の描写が光る。評者は晩年の前田の話をも、三回聞いたのだが、「ヒンターラント（Hinterland＝後背地）」という言葉が印象に残った。定年退職後も関西の様々な運動の相談

役のようなことを続けていた。若い時の前田が共産党から離れて独自の勢力形成に突き進む話は本書で初めて詳しく知ることができた。ブントの活動家（東大生）でありながら、貧しい階層出身の苦労人として本書で紹介される古賀康正の姿が印象的である。学生運動と労働運動という異なるフィールドを横断してもそのどちらからも拒否されない風貌とハビトゥスを兼ね備えたオルガナイザーとしての特異な姿である。評者はこの人物のことは本書で初めて知り得た。

「今日の研究発表には〇〇への言及がない（のはおかしい）」といった類のコメントには意味がないと評者は常々考えている。とはいえ、六〇年安保闘争を主題にした研究であるのなら、やはりその前史である五〇年代共産党の紆余曲折と六〇年安保闘争後の新左翼運動の成長と瓦解についてももう少し言及があるべきではなかったか。特に評者が気になるのは、全学連主流派（あるいはブント系学生生活動家）の六〇年安保闘争「敗北」後の瓦解の理由の解明（のなさ）であり、全学連反主流派の位置づけであり、全学連主流派の「逸脱的行為」（320頁の注104参照）についての評価の甘さである。

第一の点について。全学連主流派の指導的メンバーはブント（第一次共産主義者同盟）の同盟員だった。ブントは日本共産党に代わる「真の革命党」を目指した革命家の集団（のはず）である。しかし、運動の戦略戦術の組み方が、良く言えば斬新かつ大胆、悪く言えば博徒のような無責任さを感じさせるところがある。「安保にブントのすべてをかける」といったスローガンは、大衆扇動のレトリックとしてならともかく、革命党を自称する組織が採用する方針とは思えない素人臭さがある。戦略戦術は元来戦争論のなかで練り上げられた概念だ。戦術は戦闘を勝利に導くための理論（学問）であり、戦

略は複数の戦闘を結合して戦争を勝利に導くための理論（学問）である（クラウゼヴィッツ『戦争論』参照）。この戦争論が革命論に転用された。議会や議会外の行動を勝利に導くのが戦術、複数の戦術を組み合わせる革命を勝利に導くのが戦略となる（スターリン『レーニン主義の基礎』参照）。この区別で言えば、六〇年安保闘争はたとえ大規模な運動として盛り上がったにしても、明らかに戦闘であり、必要とされるのは戦術であったはずだ。その一戦闘に、革命のための党の総力を注ぐというのは、判断がおかしいのである（もちろん、ブントは極めて小さいセクトだったから一戦闘だったはずの安保闘争に総力を注ぎ結果として潰れたという評価も可能だが）。

こうした戦略戦術の適用のちぐはぐさと見事に対応している（と評者には見える）のが、六〇年安保闘争「敗北」後のブント最高幹部たちの速やかな転向である。これは戦前共産党の集団転向とは異なって、国家権力による強制がほとんどないにもかかわらず生じた、極めて特異な集団転向現象なのではないか。評者は六〇年安保闘争史を新左翼の観点から叙述する著書（蔵田計成著『安保全学連』、中島誠編著『全学連』など）を40年近く前に読んだときから不思議で仕方がない。ブント書記長の島成郎、理論指導者だった青木昌彦（姫岡玲治）、佐伯秀光（山口一理）、生田浩二、大衆運動面での人気者だった西部邁らは皆、医師になったり大学院に進学して大学教授になっている（生田は米国留学中に死去）。彼らほど目立つポジションにいなかったものの、ヘーゲル研究者となった加藤尚武、医者になった石井暎禧（『聞書き〈ブント〉一代』著者）らもいる。本書は、こうした転身をブントの学生リーダーたちが文化資本・象徴資本を潤沢に持ったエリートだったからだと説明して済ませている（本書184頁以

下）ように思われるが、著者は不思議に思わなかったのだろうか。彼らは「六〇年安保闘争は敗北だ」と総括した後、挫折による内面の傷を癒す苦労はしたかもしれないが、外から観察する限り実にあっけらかんと転向して、その後は自らの剥き出しの立身出世欲に身を任せたように見える（闘争敗北後も大学に助手として残り、その後の全共闘運動にも助手共闘として参加して理論物理学者としての道を棒に振った長崎浩はむしろ珍しいタイプではないか）。もちろん「剥き出しの立身出世」に走ったのではなく、闘うフィールドを変えた「転戦」とみなすことも不可能ではない（沖縄の地域医療に挺身した島成郎のように）。しかし、革命家が「転戦」したのではない。革命家を辞めて転戦したのである。まるで彼らにとって「革命家」とはパートタイムや期間限定で従事するアルバイトだったかのように評者には見える。もちろん日本共産党にもそうしたケースがないわけではない（戦前の水野成夫、戦後の渡辺恒雄、堤清二ら）。しかし、指導部のトップが率先して集団的に転向する事例は世界的にも聞いたことがない（戦前共産党の集団転向は、国家権力の強制と、コミンテルンによる指導への不信感との合成により生じたものでありブントの集団転向とは性格を異にする）。本書は、共産党とブントを同じ「日本の共産主義運動のフィールド」に属すとみなすが（174頁ほか）、そもそも共産党とブントは同じ共産主義のフィールドに属していなかったと考える方が理にかなっているのではないか。つまり、本書が一貫して回避しているように見える両者のイデオロギーの分析が不可欠なのである。

第二の点について。戦後日本共産党の五〇年分裂とその後の紆余曲折が学生活動家たちのブント結成を促したことはよく知られており、本書でもその経緯がインタビューも含めて紹介さ

れている。周知のとおり1958年六・一事件で全学連の主要幹部たちは共産党から除名されてしまうのだが、しかし当の共産党も一枚岩ではなかった。とりわけ東京都委員会などは、第七回党大会（1958年夏）に向けて党中央と綱領論争を継続中だったし、党大会後も粘り強く論争の形で党内闘争を続けた。後の構造改革派である（ただし長崎浩は、評者との私的な会話のなかで「構造改革派は共産党内での闘争が不徹底であり、集団的に離党・脱党する形で勢力を形成した。むしろ党内闘争を徹底したのがブントだった」（大意）と語っていたが）。こうした共産党内の動きとブント結成後も党に残った学生活動家たちが無関係であったはずがない。それゆえ全学連の反主流派を形成した学生党員たち（およびその背後で指導に当たった共産党の活動家たち）は、一方で全学連主流派（ブント）の活動家たちと党派闘争を行ないながら、他方で党中央と論争を継続する東京都委員会を中心とする中堅幹部たちの影響を受けることで党中央から相対的に自立した位置取りをしたと考えられる。それが1961年からの構造改革派の党からの除名により表面化した事態である。つまり、当時隠然たる影響力を持っていた日本共産党の動向や路線のジグザグの分析抜きに、知識人の運動や学生運動を自立したフィールドとして分析することはできないのではないかということである（六〇年安保闘争の渦中で清水幾太郎が全学連主流派に加担する者として共産党から厳しい批判の対象となり、それを境に周囲の態度が激変したことが清水の自伝に記されている。闘争終結後の鶴見俊輔らとの離反の理由も共産党評価をめぐるものだった）。

このような全学連反主流派の背景としての当時の共産党内部の動きを知るうえで重要になるのが構造改革派として党を除名された人々（東京都委員会の中堅幹部たち）の回想録だ（本書

で言及がない石堂清倫『続わが異端の昭和史』や安東仁兵衛『戦後日本共産党私記』など）。また全学連のリーダーだった国文学者の野口武彦（185頁）は存命なのでインタビューが可能だったのではないかと（打診したが断られたのかもしれない）。

本書は、広義の60年代末の闘争と比べて記録や研究が少ない六〇年安保闘争を主題にしたところに意義がある。他方、その後の新左翼の盛衰との関連で六〇年安保闘争を捉える視点が弱いことが問題点である。すでに六〇年安保闘争の渦中でその後の新左翼運動の挫折や失敗を先取りする事象が現れていたにもかかわらず、それらを民主主義の「ゲームのルール」の枠内にあるものとして本書が事実上容認していると評者には読めた。それは「ボルシェヴィキ選挙」と全学連大会における「反主流派」への実力排除の説明の仕方である（190～191頁）。前者（自治会役員選挙での不正）は学生自治会という公的組織（大衆団体）をしょせんは私的組織に過ぎない一政治党派が私物化することだ。後者（反主流派の実力排除）は内ゲバそのものではないのか。どちらもその後の新左翼諸党派の運動のなかで定着する作風だ。しかも、左翼の内ゲバはこれが最初ではない。戦後に限ってみても、1950年の共産党の分裂の際に、所感派と国際派の対立から学生運動の内部でスパイ査問・リンチ事件が起きている（安東『私記』第七章ほか参照）。新左翼運動のなかでは六〇年安保闘争の後、マル学同（革共同の学生組織）が分裂し中核派と革マル派のあいだで計画的な襲撃が行われるようになった（奥浩平『青春の墓標』などを参照）のが日本新左翼における本格的な内ゲバの始まりだとする史観が有力だが、評者が見るところ、六〇年安保闘争の際のブント（全学連主流派）の反主流派に対する内ゲバが比較的牧歌的なものだった（本書



191頁)だけのことで、こうした「内ゲバ体質」は旧左翼・新左翼の別なく継承されているのである。この継承関係に敏感であれば、この二つの事象(ボルシェヴィキ選挙と内ゲバ)を紹介・説明するに際して「時に『逸脱的行為』を行ないながら、プントは『民主主義のルール』で、覇権闘争をすすめた」(320頁の注104)と

いった没批判的な記述は出てこなかっただろうに。

(猿谷弘江著『六〇年安保闘争と知識人・学生・労働者——社会運動の歴史社会学』新曜社、2021年3月、388頁、定価5,500円(税込))

(なかむら・かつみ 中央大学・群馬大学非常勤講師)